施文技術からみた西盟型銅鼓の新古

宮川禎一

一　はじめに

東南アジアの考古遺物を代表するものに銅鼓がある。銅鼓は紀元前数世紀から二十世紀にいたるまで数系統に分かれながらも連綿と生産され用いられてきた。その分布範囲は中国南部からインドシナ半島・スンダ列島にわたる広大な地域におよぶ。中国雲南省の石寨山古墓出土の銅鼓やベトナムのドンソン遺跡出土品などがよく知られている。銅鼓の研究は十九世紀以来ヨーロッパの学者を中心におこなわれ、近年では中国やベトナムの研究者によっても盛んに研究されている。

本稿で考察の対象とする銅鼓はインドシナ半島の山岳地帯に住むシャン族やカレン族などの少数民族が数百年前から現在まで使用している型式でヘーゲル（F. Heger）の分類で第Ⅲ型式[1]、中国では雲南省の地名から「西盟型[2]」と呼ばれる銅鼓である。その分布域はおよそミャンマー東北部から中国雲南省の南西部辺境地域、ラオス北部、タイ北部にかけてのインドシナ半島山岳部である（挿図1）。通常は伝世品であり遺跡からの出土品は少ない。現在までなお祭祀に用いられているというがその詳細はあきらかではない。西盟型銅鼓はヘーゲルの「第Ⅲ型式」の銅鼓と同じものを指しているが本稿では便宜的に西盟型と呼ぶことにする。日本国内では西盟型銅鼓は博物館・美術館などの収蔵品と個人蔵品などを含めると二十点近くが確認され、未確認の個人所蔵品などを加えれば四十点を越えるとみられる。他型式である冷水冲型や麻江型に比べて数が多く、日本所在の銅鼓の約半数はこの西盟型銅鼓であるといえる。

西盟型銅鼓の形態や装飾の特徴をまとめると次のようなものである（挿図2）。

- 鼓面が平坦で胸部との接合部から突出しており、一～三段重ねの蛙像が四ヶ所に付く。
- 胸部～腰部～足部の境は明瞭でなく、腰～足部は基本的に筒状である。
- 文様は主に凹んでおり、花・鳥・菱形・重圏などが規則的に配置される。
- 側面に象や蝸牛、樹木を浮き出して表現したものがある。

・把手は胸部の対称の位置に二個ずつ四個配置され、その付け根には台形の編物状装飾が付く。
・主に失蠟法によって鋳造される。

西盟型銅鼓（ヘーゲル第Ⅲ型式）の存在ははやくから知られていたのだが、どのような変遷を遂げたのかについては中国の研究者によって大要が示されている[3]にすぎない。そこで本稿では具体的な銅鼓の紹介とともに鋳造・施文技術の分析検討を主眼において西盟型銅鼓の先後関係を明らかにしてみたい。

挿図１　西盟型銅鼓の分布地域（破線内）

二　西盟型銅鼓における失蠟法鋳造

西盟型銅鼓にはほかの型式の銅鼓にはないさまざまな特色がみられるが、その要因は失蠟法鋳造（Lost Wax）にある。西盟型銅鼓の大多数はこの方法で製作されており、そうでないものはごく一部だけである。

失蠟法鋳造の基本は「製品の原型を蠟でつくり、それを土製鋳型にくるみ込んで、全体を乾燥させたのち加熱して原型となっていた

挿図２　西盟型銅鼓の部分名称

蠟を溶かし出す。そして蠟が抜け出た空間に溶解した金属を注ぎ込んで形をつくる。金属が固まったあとに鋳型をこわし、製品をとりだす」というものである。外型を分割して製作し、それを中子の周囲で組立てて鋳造する方法、仮に「分割外型鋳造」と呼ぶ方法とは技術的に大きく異なる。

失蠟法はオーバーハングのあるような複雑な形状を得意とし、凹文様の表現も容易である。鋳型の構造上、大型品よりは小型品に適する。鋳型のあわせめが削り落とされたりして見えない場合、失蠟法なのか分割外型鋳造なのか判別不可能な場合もある。また分割外型鋳造の一部に組入れられる場合もあったようで、その判定には慎重な観察を要する。鋳型の製作には手間がかかり大量生産には向いていない。現在の失蠟法が精密部品や特別な美術作品、指輪等の宝飾品の鋳造などに限られているのもその特性によっている。

失蠟法の開始は古い。西アジアやヨーロッパの青銅器時代の遺物には失蠟法の青銅製品は多いとされる。銅鼓においても最古型式の先Ⅰ式（万家壩型）にすでに存在すると指摘されている。[4] ヘーゲルの第Ⅰ型式前半の石寨山型銅鼓では共伴する貯貝器上の立体装飾は失蠟法でなければできない躍動感のある複雑な造形である。また石寨山型やドンソン系銅鼓など第Ⅰ型式銅鼓の鼓面や側面には凹んだ絵画や文様を持つものがあるがそれらも何らかの方法で蠟原型を使用したという説がある。

しかしながらヘーゲルの第Ⅱ型式（霊山型・北流型―側面外型二分割）や第Ⅳ型式（麻江型―側面外型四分割）の銅鼓は側面の鋳型のあわせめの痕が明瞭なうえに文様も凸を主体としており分割外型鋳造であったことは明白である。

中部アフリカやインド・デカン高原・ネパールなどの諸民族の工芸品には失蠟法による青銅器や真鍮製品があり、現在も製作されている。

日本の弥生時代の銅鐸や銅剣・銅矛などは失蠟法鋳造ではない。古墳時代の仿製鏡や青銅製馬鐸なども失蠟法ではない。また奈良時代以降の梵鐘でも失蠟法はほとんど用いられていない。それらは分割外型鋳造である。失蠟法の可能性があるのは飛鳥時代以降の金銅仏や小型の仏具・銅印などである。また正倉院文書には鏡の鋳造に必要なものに「蠟」をあげた記録があるので奈良時代の鋳鏡には蠟原型が使用されていたらしい。しかしながら日本の古代の青銅製品で失蠟法鋳造であることを明瞭に示す製品は多くない。

本稿であつかう西盟型銅鼓の鋳造技術がアジアの失蠟法鋳造の系譜のどの位置に属するのかを正確に述べることは現在のところ大変難しい。しかし西盟型銅鼓の形状や文様の特質とその変遷過程を理解するには失蠟法鋳造の特性に十分注意を払うべきである。

まず西盟型銅鼓の製作手順を概観しておこう。

西盟型銅鼓の製作技法についてはいくつかの文献[5]やインドの民俗例にみられる失蠟法鋳造[6]、および実際の銅鼓の観察結果をあわせ次のような工程であったと推測される（挿図3）。

①内型の製作、②蠟原型の製作、③蠟原型の加工、④外型の製作、⑤乾燥と加熱、⑥鋳込み、⑦型はずし、⑧仕上げ。

①内型の製作。

植物質の篭のような材料を用いて内側の芯の部分をつくる。粘土と籾殻を混ぜて芯のうえに塗り付ける。さらに粘土と牛糞とを調合したものを平均的に塗り付けるという。銅鼓の体部は水平断面が正

円であるので、梵鐘の鋳型などと同様の引板を回転させる引型法で内型を仕上げていたと推測される。回転によって滑らかな平面（鼓面内面）と曲面（側面内面）ができあがると内型の完成である。観察することのできた西盟型銅鼓では内面に文様や銘文を入れたものは無かったので、この段階では何も手を加えないようである。内型そのものは地面に据えられていたのではなく、ろくろ台のように回転するもの、あるいは中心に軸木をもつ串刺し状の回転体であったと推測される。

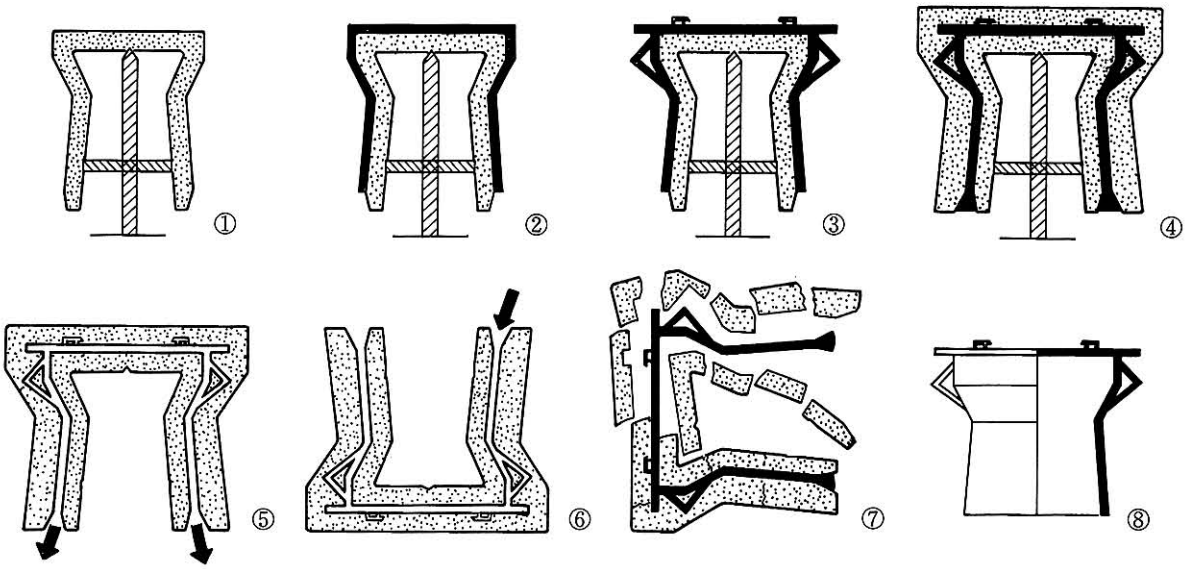
②蠟原型の製作

内型を乾燥させたのちそのうえに蠟原型本体部分を製作する。使用される蠟は基本的に蜜蜂の巣からとれる黄色い蜜蠟である。蠟の軟らかさや流動性が原型製作に適するように蜜蠟に樹脂（松脂）や動物脂（牛脂）を適当な割合で混ぜて使用したという。西盟型銅鼓完成品の断面はわずか二ミリ程の薄さであり、蠟を使用してこの微妙な厚みを均一化するためにはたんに塗り付けただけではなく、引板を内型の周りで回転させるか、あるいは引板を固定して内型そのものを正確に回転させたと推測される。内型の段階ではなかった鼓面の張り出しの部分をつくることも必要である（この蠟原型製作の手順にはなお検討の余地がある）。

③蠟原型の加工

最初の蠟原型は圏線も文様もない厚みだけの平滑な回転体である。完成品にみられる文様や立体装飾はこの平滑な面のうえに施される。その順序は製品上にみえる切りあい関係から次のようなものであることがわかる。

イ・施文　多くの西盟型銅鼓では施文がさきで圏線はあとに施



挿図３　西盟型銅鼓の製作工程模式図

される。施文は文様が刻まれたスタンプ原体を軟らかい蠟原型のうえに押していったもので凹んだ文様となる。この凹み文様が西盟型銅鼓の最大の特徴といえる。後述するようにスタンプを押捺する際の技法にはいくつかの種類があり、その違いが銅鼓の先後関係をよく示す。文様は鼓面では正確に円形に配され、側面でも正しく水平に施されているところから、引板に細工を加えたような「施文装置」があったと推測される。花文や重圏文・鳥文・櫛歯文など五種類から十種類の文様原体を蠟原型に押して施文している。

ロ・縦隆帯　西盟型銅鼓では側面に縦方向の細いもりあがった二条の帯が対称の位置に施されている。一見、鋳型の合わせ目の痕跡のようだが、そうではない。「擬合笵痕」である。西盟型銅鼓の祖形となった冷水冲型銅鼓などの側面にみられる二条の鋳型の合わせ目を摸したもので、ルジメント（痕跡器官）の典型である。蠟原型のうえに蠟の帯を縦方向に貼りつけて隆帯をなした。縦四条の例もある。

ハ・圏線　圏線はスタンプによる施文の後に施す。西盟型銅鼓の圏線は蠟塊を容器に入れ小孔から絞り出してできる細ヒモ状の「蠟糸」によって作られた場合が多い。圏線がはがれたようになった部分を観察すると、圏線の下に文様が見える場合があることや圏線の断面が円いヒモ状になっていることなどからそれがわかる（挿図16）。鼓面の圏線を正確に円形に配置するためには何らかの装置があったのであろうが具体的な技術は不明である。また側面の圏線は縦隆帯のうえを越して巡っていることから、圏線が縦隆帯より後に施されたことがわかる。

ニ・立体装飾・把手　西盟型の新しい段階に特徴的な象や蝸牛装飾や樹木状装飾、また鼓面の四方向に配置された蛙像、さらに胸部に付される把手などは蠟で形を作り貼り付けたものである。樹木状の文様では蠟糸を螺旋にしたものを、把手のつけね部分には蠟糸を搓って網目状にしたものを貼り付ける。さらに鼓面の周縁部には蠟糸を鎖状に飾る場合が多い。このような蠟糸の多用が西盟型銅鼓の特徴のひとつである。

イロハニの工程を経て完成品と全く同じ形状の黄色い蠟原型が出来上がる。

④外型の製作

外型の製作も丁寧におこなわれた。まず後で湯口となる部分（足端部か）に数ケ所、蠟による漏斗状の柱を付加する。そして細かい粘土を水篩した泥土を蠟原型にかけていく。焼き物に釉薬をかけるような具合である。この工程の丁寧さが繊細な文様表現を可能にしたと考えられる。乾燥と泥掛けを丹念に繰り返しある程度の厚みができた段階で粘土と籾殻を混ぜたものを塗りつけて外型を堅固なものにするという。こうして蠟原型をくるみ込んだ鋳型の全体が完成する。なお銅鼓の鼓面部分に型持の痕とみられるものが有る場合もある。型持ち孔を鋳掛けしてふさいだらしい。また全く痕跡のないものもあり型持ちを使用した場合と使用しなかった場合とがあったようである。

⑤乾燥と過熱

出来上がった鋳型全体は時間をかけて乾燥させる。乾燥を終えた後、鋳造の直前に鋳型の外部から徐々に熱を加えて湯口から蠟を溶かしだす。失蠟すなわちロストワックスの段階である。これによって銅鼓となるべき部分に空間が生じる。その後もさらに過熱し鋳型

を焼きあげる。これが鋳込みの直前の段階である。

⑥鋳込み

溶解した青銅を熱した鋳型の湯口からから注ぎ込んで鋳造する。[7]

⑦型はずし

ある程度温度が下がり、青銅が固体化した段階で外型と内型を壊して製品をとりだす。

⑧仕上げ

湯口を切断し細部を研磨するなどして外形の仕上げをおこなう。また鼓面の型持孔に鋳掛けする場合もある。

このような工程を経て一個の西盟型銅鼓が完成する。蠟原型の製作や施文、また粘土型の乾燥に充分時間をとって作業を進めるので完成までにはある程度の日数を要したであろう。同様の大きさの銅鼓を分割外型鋳造で製作した場合よりも必ず遅いとは言い切れないが、簡単な作業ではなかったことは理解されよう。

一方、失蠟法鋳造の利点としては器壁が薄く軽い製品ができること、文様の仕上がりが繊細であること、スタンプ施文による凹文様と蠟糸貼付けによる圏線や立体装飾が容易に施せることなどを挙げることができる。西盟型銅鼓の最盛期にはその特性を最大限に生かした造形が行われており、失蠟法鋳造のひとつの到達点を示す製品であると言っても過言ではない。

三　西盟型銅鼓の四分類

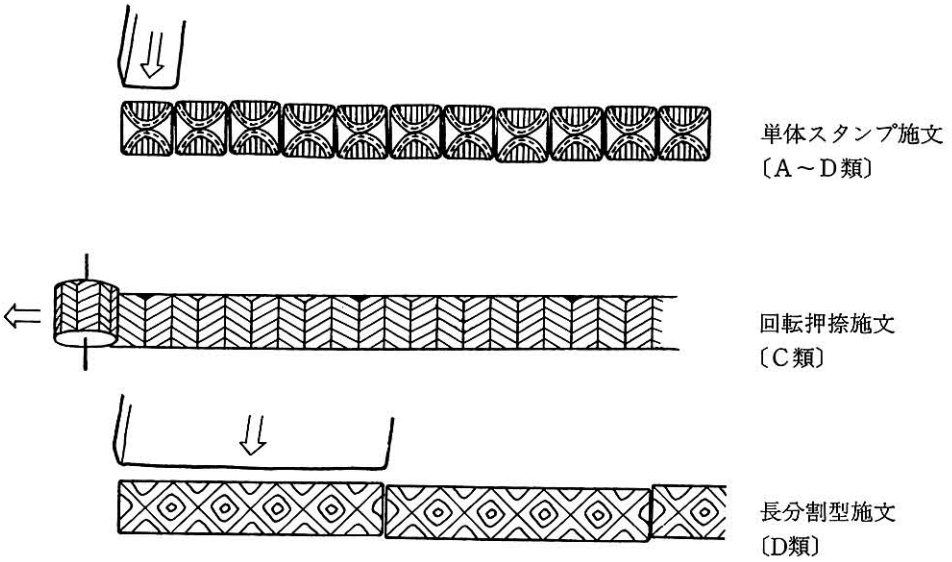
本稿では個々の西盟型銅鼓を蠟原型に文様を付ける際のテクニックの差異を基本として次のA類～D類の四つに分類した。それぞれは時間的な先後関係も表している。

A類―分割外型鋳造＋単体スタンプ施文

B類―失　蠟　法鋳造＋単体スタンプ施文

C類―失　蠟　法鋳造＋単体スタンプ施文＋回転押捺施文

D類―失　蠟　法鋳造＋単体スタンプ施文＋長分割型施文



挿図４　三種類の施文技術模式図

分割外型と失蠟法の差は説明してきたとおりであるが、単体スタンプ施文と回転押捺施文、長分割型施文について簡単に説明しておきたい（挿図4）。

「単体スタンプ施文」とは、ひとつのスタンプにひとつの文様を刻み、そのスタンプ原体を外型なり蠟原型なりに直接押捺を繰り返して文様帯をなす押し方である。スタンプ施文としてはごく基本的なもの。

「回転押捺施文」は、この西盟型銅鼓の場合、直径一～二センチ程度の小さな円柱に文様を刻み、蠟原型の上を転がして切れ目のない連続文様を付ける施文方法である。最盛期の西盟型銅鼓では多用されるテクニックである。

「長分割型施文」は、横に長いスタンプ原体に単位文様を繰り返し十個ほどならべて刻んだものであり、製品では一見連続する文様のようだが必ず切れ目をもっている。西盟型変遷の末期にあらわれる。

この三種類の施文の差に留意しながら西盟型銅鼓を次のA・B・C・Dに四分類した。

西盟型銅鼓A類

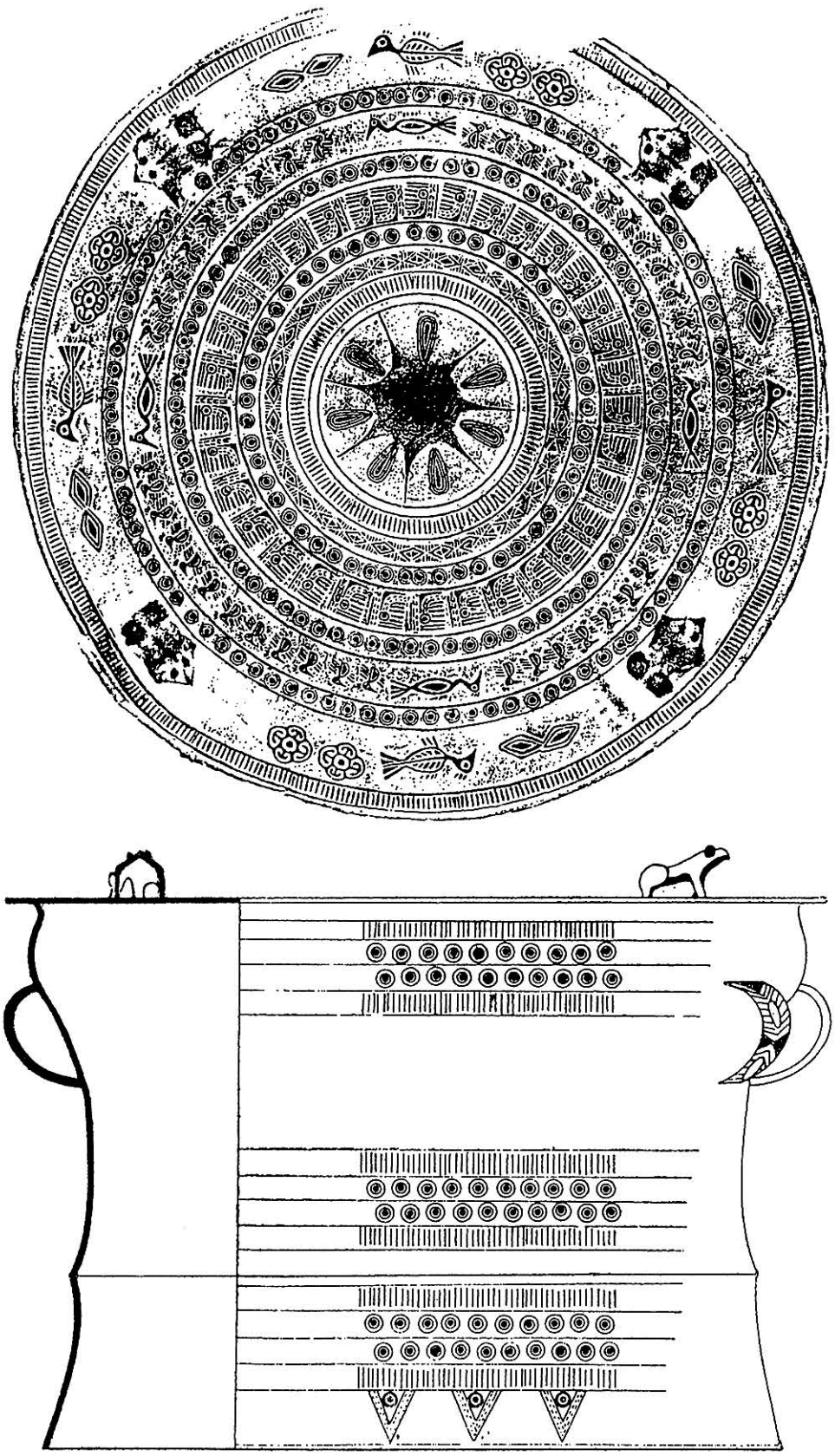
西盟型銅鼓A類は「分割外型鋳造を用い、単体スタンプによる押捺施文をおこなうもの」で中国の研究者が西盟型早期としているものである。ただし筆者は現物を直接観察してはいない。広西省博物館所蔵31号鼓（挿図5）がその代表例である。[8]

出土地は広西省龍州県响水。面径四九・九センチ。身高三三・四センチ。鼓面には一重の蛙像が四方に付く。側面形をみると足端部から約三分の一ほどの高さに屈曲する稜をもっている。鼓面と側面の文様はすべて凸であり、失蠟法ではなく「分割外型鋳造」された可能性が高い。形状では側面に稜をもつなど一般的な西盟型の形とは異なっており、古い型式の銅鼓の影響が濃い。さらに西盟型銅鼓の分布域を遠くはずれた広西省西部出土という点も考慮を要する。本例を西盟型に含めるのに抵抗感があるのは事実である。

しかし文様をみると典型的な西盟型銅鼓と共通する部分もある。大中小三種類の飛鳥文が用いられる点。同一文様帯内に菱形・髪飾・大型飛鳥文の組み合わせが共存する点。各文様は単体スタンプで施される点。側面文様帯が三段に区分される点。全体に背が高く華奢である点、などの要素である。実際、本例を銅鼓系譜のどこに位置付けるのかと問われれば西盟型の範疇に含めないわけにはいかない。次に述べる西盟型B類との類縁関係が最も深いとみられるからである。西盟型A類としたこの広西省博物館所蔵31号鼓ともう一例（広西省靖西県庭豪山鼓）については種々の検討課題が残るものの、西盟型銅鼓系譜の最上流部すなわち失蠟法獲得以前の段階に位置付けるのが妥当であろう。

西盟型銅鼓B類

西盟型銅鼓B類は「失蠟法鋳造を用い、単体スタンプによる押捺施文をおこなうもの」である。失蠟法獲得後あまり降らない時期の銅鼓であり、中国の研究者が西盟型中期としているものにあたる。日本国内での実例としては東京都台東区浅草の太鼓館に所蔵されているもの（資料No.283、以下太鼓館鼓と呼ぶ）と個人所蔵品の二点を実見した。日本国内の例は少なく、西盟型全体をみても少数派である



挿図5　広西省博物館31号銅鼓（西盟型A類）　S＝1/4

らしい。

ここでは太皷館鼓について具体的にみてみよう（挿図6）。

ミャンマーから購入したもの。面径五一・三センチ。高三六・六センチ。足径三六・三センチ。西盟型としては小型に属する。側面の厚さは約二ミリと薄く、重量は約七キログラムである。全体の大きさに比して軽い印象を受ける。暗褐色を呈する。鼓面は若干中央部が凹んでいるもののほぼ平坦である。鼓面の端部の四箇所には左まわりの蛙像各一匹が付いている。胸部は直立気味でゆるやかにすぼまって足部へとつらなっている。胸部には縦方向の把手が二個一組で向かい合う位置に付いている。足端部は若干開き気味である。内面は平滑で文様や凸線などはみられない。

鼓面の文様（挿図19）

鼓面の文様は同心円状の圏線にはさまれた区画内に同一文様が配されている。中心から外側にむかって1～25区画ある。それぞれを第〇帯と記述する。

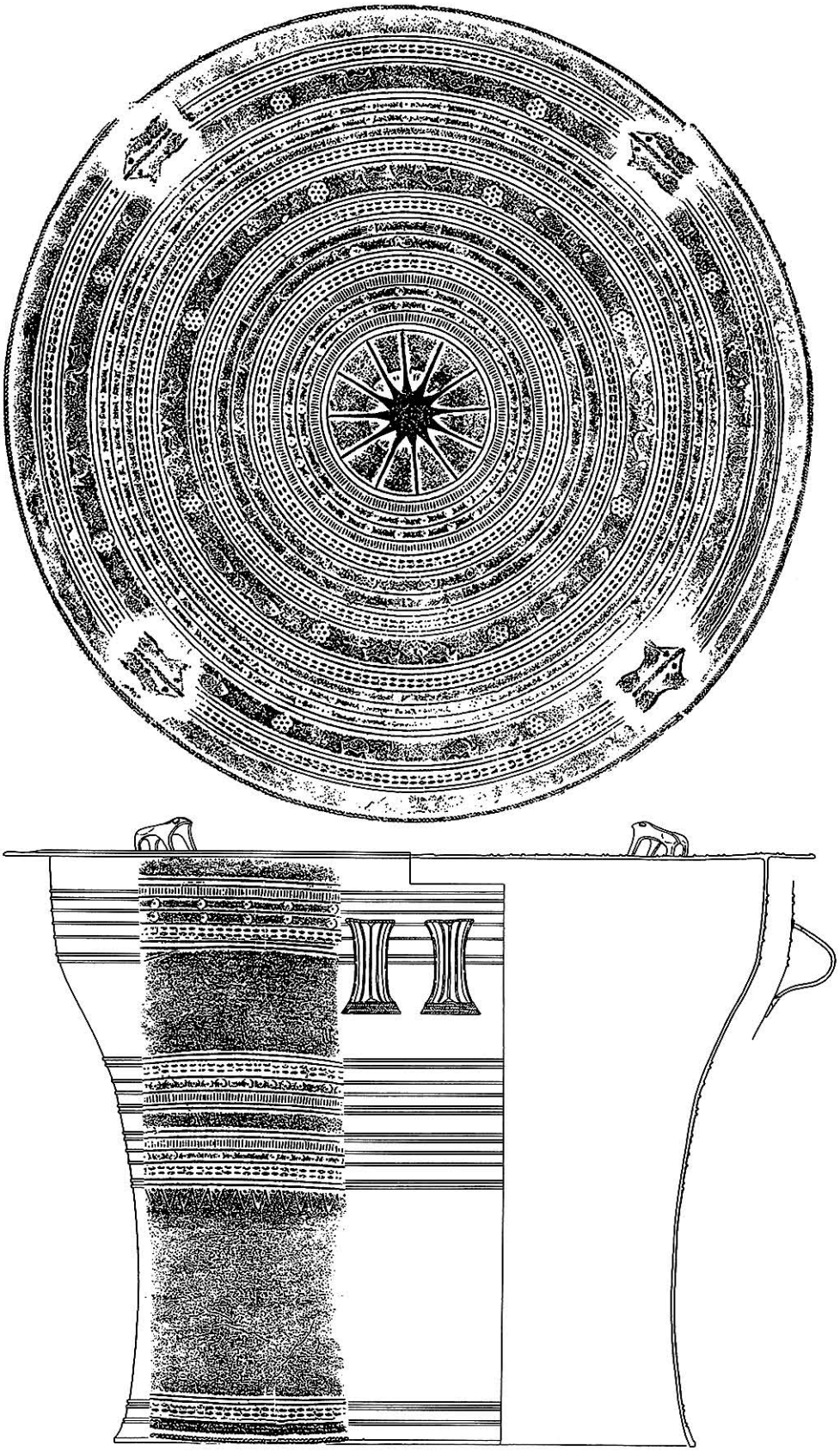
中心区画（第1帯）は十二光芒の太陽文で、西盟型独特の細長い光芒をもつ。光芒間には心葉形文（鳥頭文）が入る。光芒の先端は第1圏線に接して止まっている。

第2帯は幅の狭い無文様帯。第3帯は櫛歯文で、細い直線を密に施している。五本一単位のスタンプ施文とみられる。第4帯は円文。第5帯も円文（同前）。第6帯は櫛歯文で第3帯と同じ。第3～6帯は対称配置となっている。第7帯は楕円文。一区画内に四つの小型の楕円を入れた文様を埋めていくものである。第8帯は幅の狭い無文様帯。第9帯は小型の飛鳥文。この銅鼓には大小二種類の鳥の文様があるが、こちらは尾や羽を持たないひよこ形の小型の鳥文。頭が外向きで左回りにほどこされる。

第10帯は変形羽人文（遊旗文）。これは古くヘーゲルの第Ⅰ型式銅鼓に施された「鳥人文」の変化したものである。四角形の区画の中に小円・直線を複合させた図案を入れるもので、小円は鳥人の目、直線は鳥人が手に持つ盾が変形したものとみられる。変形羽人文をもつ西盟型銅鼓は例が少ない。第11帯は幅の狭い無文様帯。第12帯は楕円文で第7帯と同じ。第13帯は幅の狭い無文様帯。第11～13帯はひと組である。

第14帯は主文様帯。この第14帯と第21帯はこの鼓面の中の文様帯のうち最も幅広く、内容に富んでおり、主文様帯の名にふさわしい。施された文様は三種類で、花文・飛鳥文・魚文である。花文は六弁。飛鳥文は尾羽をもつ大型のもの。魚文も大型のものである。飛鳥文と魚文はいずれも外周側を上にして左回りに施されている。古い型式である石寨山型銅鼓や冷水冲型銅鼓では飛鳥文は鼓面の中心部を上にして左回りに配置されるのが普通であるが、この西盟型銅鼓では鳥の上下が反対になっているのは注意される。第14帯では文様の配列は花・鳥・鳥・花・魚・魚の繰り返しである。飛鳥文と花文は西盟型ではほぼ必ずみられる文様だが、魚文は珍しい。第15帯は幅の狭い無文様帯。第16帯は楕円文、第7・12帯と同じである。

第17帯は変形舟文。一見x字状の文様であるが、これはヘーゲル第Ⅰ型式後半（冷水冲型銅鼓）からヘーゲル第Ⅱ型式（北流型）に見られる舟文様を小さく写したものである。古い段階での舟は、競舟を写実的に表現した図像である。その舟の形状を段々変形させていったものがみられるが、この太皷館鼓の舟図はもとが何であったか判らなくなるほど変形している。



挿図6　太鼓館銅鼓（西盟型B類）　S＝1/4

第18帯は円文。第19帯も円文。第20帯は幅の狭い無文様帯。第21帯は主文様帯で第14帯と同じ内容。外側にあって円周が大きいぶん文様の間隔が広がっている。第22帯は幅の狭い無文様帯。第23帯は楕円文、第7・12・16帯と同じ。第24帯は幅の狭い無文様帯。第25帯は最外縁の無文様帯。縁辺は鎖状装飾。

側面の文様配置にも西盟型独自の規範があり、太皷館鼓も例外ではない。側面文様は胸部文様帯・腰部文様帯・足部文様帯の三群に分かれる。

胸部文様帯　鼓面の直下にある文様帯。七本の圏線からなる六帯構成だが、上下の無文様帯を除いて実質四帯（2～5帯）からなる。上から順番に記述する。

第1帯は幅の狭い無文様帯。第2帯は櫛歯文、鼓面と同じ原体による。約10本ひと単位。第3帯は円文、鼓面と同じ原体による。第4帯も円文、同前。第5帯は楕円文、鼓面と同じ原体。第6帯は幅の狭い無文様帯。

腰部文様帯　すぼまる部分を腰部と呼んでいるが、ここに十二本の圏線からなる幅の広い文様帯がある。ほぼ中央にある無文様帯を挟んで上下に対称となるように文様が配列されている。上から下へ順に記す。第1帯は幅の狭い無文様帯。第2帯は楕円文。第3帯は円文、やや密に施されている。第4帯は櫛歯文。第5帯は幅の狭い無文様帯。第6帯は無文様帯で、他の文様帯よりもやや幅が広い。第7帯は幅の狭い無文様帯。第8帯は櫛歯文。第9帯は円文。第10帯は楕円文。第11帯は幅の狭い無文様帯。垂下文様帯―第11帯の下側に垂れ下がるように文様を施すのが西盟型銅鼓の文様の特徴のひとつである。下辺を圏線によって区切られない文様であり、この部分、腰部文様帯下端の文様形状が西盟型銅鼓の時期を考えるうえでの重要な観察ポイントである。本例では二等辺三角形の中に小円文と綾杉状の文様を入れた形状の逆三角形の文様を密に繰り返し施文したものである（挿図23）。この逆三角形文はもともとA類では足端部にいれるものであったが、西盟型B類では腰部文様帯の下端に移動している。

足部文様帯　足端部の文様は他に比べて簡素である。第1帯は幅の狭い無文様帯。第2帯は楕円文帯。というものである。普通の西盟型銅鼓、後述するC類などでは第1帯の上に腰部の垂下文様が向かい合うように施される。しかし本例にはそれはない。古い要素といえよう。足端には鎖状の装飾が巡る。

挿図7　太皷館銅鼓

挿図8　太皷館銅鼓の鼓面文様部分

太皷館鼓では鼓面の蛙像は各一匹ずつの四匹が左回りに配置されている。また把手を手前あるいは左右に置いた際、四五度ずれたX方向に配置されている。

把手は上下の端があまり横に広がらないところが古い形状であることを感じさせる。一般の西盟型銅鼓、後述するC類などでは上下の端が装飾的になって横広がりの度合いが強いものが多い。それに対して本例の装飾は簡素であるといえる。

この太皷館所蔵銅鼓に類似するものは「中国古代銅鼓」に掲載された店5号鼓、店6号鼓、店2号鼓などであるいずれも面径が四十三～四十九センチと西盟型としては比較的小さなものである。

西盟型B類の特徴は次のように整理できる。

・比較的小型で軽い。
・足部はあまりひらかない。
・蛙像は一重でX字状に配置される。
・把手は簡素で装飾が少ない。
・文様は単体スタンプ押捺だけであり、回転押型施文や長分割型施文は用いない。
・腰部文様帯下端は三角形の単体スタンプであり、綾杉文ではない。
・変形羽人文や変形舟文など古い文様要素を引き継いでいる。
・象や蝸牛、樹木状の立体装飾などはもたない。
・失蠟法鋳造によって製作される。

西盟型銅鼓C類

西盟型銅鼓C類は「失蠟法で鋳造をおこない、施文には単体スタンプだけでなく回転押捺もとりいれているもの」で、中国の研究者が西盟型晩期とするものである。最も西盟型銅鼓らしい特徴を備え、その実例も豊富である。

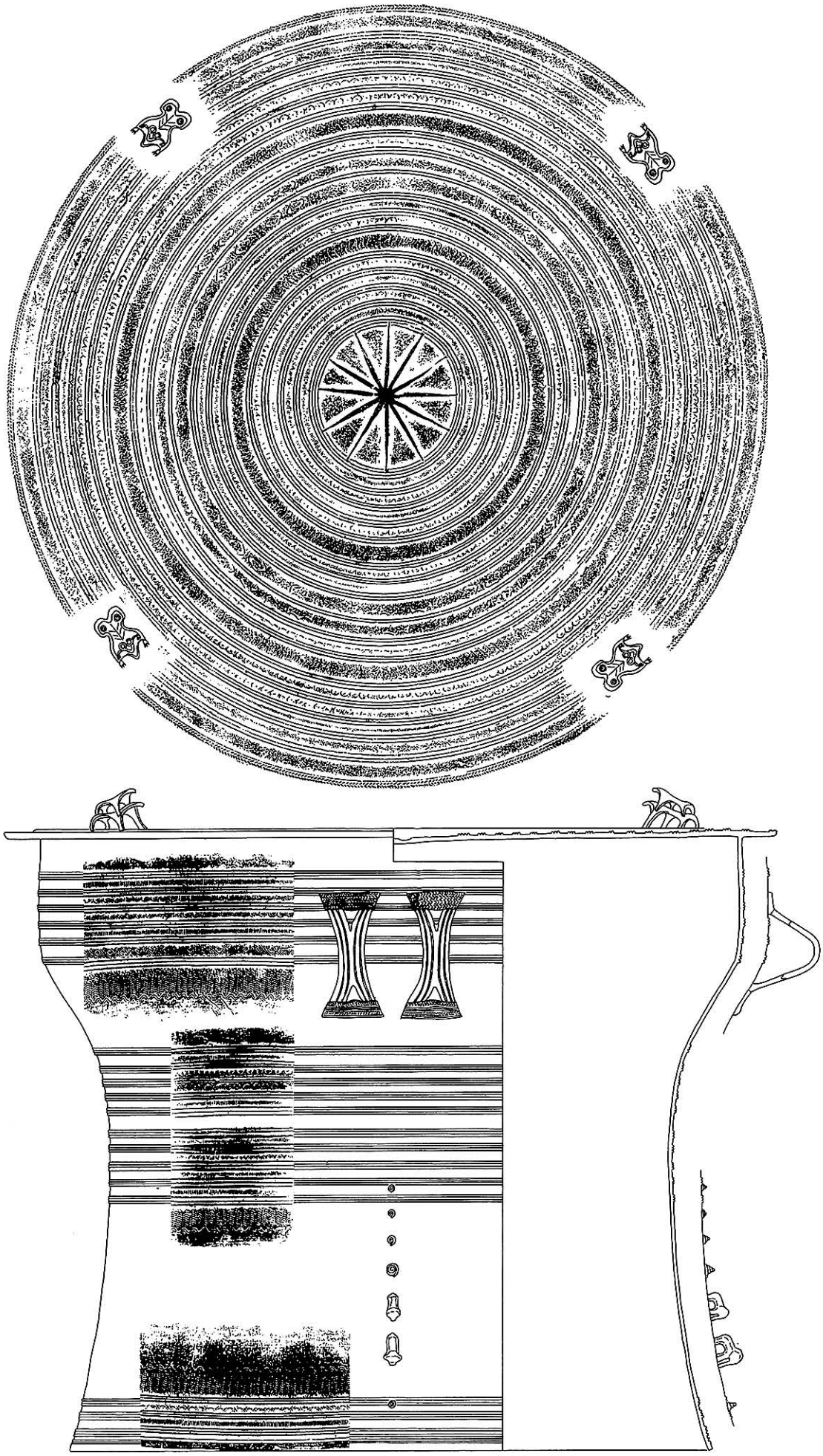
大阪府吹田市千里丘の国立民族学博物館には数点の西盟型銅鼓が収蔵されているがいずれもこのC類である。そのうち筆者が民博5号鼓（H117965）と呼ぶものをみてみよう（挿図9）。

ラオスでの収集品。面径五五・二センチ。高四四・三センチ。足径四五・六センチ。黒褐色。鼓面が広く、丈の高いおおぶりな銅鼓である。全体は薄い仕上がりで、大きさのわりに軽い印象を受ける。

鼓面の四方には二重の蛙像が左まわりに配置される。把手を左右に置いた場合、蛙の位置を結ぶ線がX字をかく置き方である。側面形はゆるやかに屈曲して足部にむけてわずかにひらく。把手は中央部で幅がせまくなるが上下端部はひろがった形である。また把手の付けねの帯状装飾は幅が広い。側面には下向きの象の小像二頭と蝸牛像五匹分が直線的につらなっている。しかし樹木状の装飾はない。

鼓面は同心円の圏線により17区画に分割される（挿図20）。

中心区画（第1帯）は十二光芒。芒体は細く、先端が第1圏線にくいこむ。光芒間には文様はない。このC類では光芒間に文様がないものが多い。第2帯は櫛歯文。第3帯は円圏文。第4帯は櫛歯文。第5帯は円圏文。第6帯は小鳥文の回転押捺施文（挿図11）。第7帯は円圏文。第8帯は櫛歯文。第9帯は主文様帯、飛鳥文三―菱形文三の交互配置、単純押捺で施される。飛鳥文は退化が進みその面影が薄い。第10帯は第9帯と同じ。第11帯は連続楕円形文の回転押捺施文。第12帯は小鳥文の回転押捺施文。第13帯は円圏文。第14帯も円圏文。第15帯は櫛歯文。第16帯は連続菱形文の回転押捺施文。



挿図9　国立民族学博物館5号銅鼓（西盟型C類）　S＝1/4

第17帯は無文様帯。周縁は鎖状装飾。

側面の文様は胸部、腰部、足部に分かれる。

胸部文様帯　文様は3条圏線によって区画される。第1帯は櫛歯文。第2帯は円圏文。第3帯は円圏文。第4帯は櫛歯文。第5帯は連続菱形文（回転押捺）。第6帯は綾杉文＋波状文（回転押捺）。

腰部文様帯　第1帯は櫛歯文。第2帯は円圏文。第3帯は円圏文。第4帯は櫛歯文。第5帯は無文様帯。第6帯は櫛歯文。第7帯は円圏文。第8帯は円圏文。第9帯は櫛歯文。第10帯は綾杉文＋波状文の回転押捺施文（挿図12）。

足部文様帯（挿図13下）　第1帯は波状文＋綾杉文（回転押捺）。第2帯は連続楕円形文（回転押捺）。第3帯は櫛歯文。

挿図10　民博5号銅鼓

挿図11　民博5号銅鼓の鼓面文様部分

挿図12　民博5号銅鼓の腰部文様帯下端に見られる連続綾杉文（矢印は回転押捺の一単位）

この民博5号鼓の文様は西盟型銅鼓の典型例のひとつで、他の銅鼓の文様も似たような形と配列をもっている。特に注意されるのは鼓面や側面の文様に回転押捺施文が多用されていることである。回転押捺施文は直径が二センチ程度の円柱に文様を繰り返し刻んだものを蠟原型の上に転がして切れ目のない連続文様を施す技術である。本例の鼓面では第6帯の小鳥文や第11帯の連続楕円文、第16帯の連続菱形文などでその使用が明らかである。それに加えて一見判断が難しいが、円圏文や櫛歯文なども回転押捺である可能性がある。

またこのC類の銅鼓でよく見られるのは側面の腰部文様帯下端にある連続する綾杉状の文様であるが、これも回転押捺施文の結果である（挿図12）。

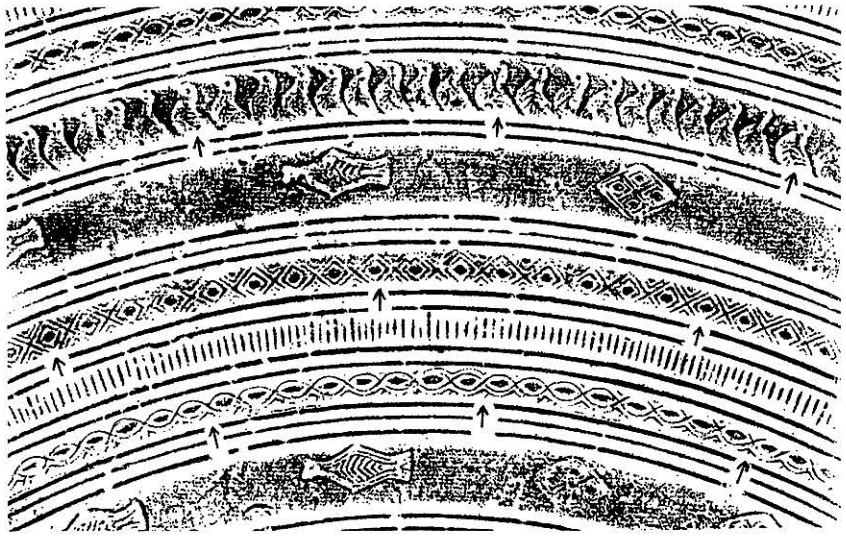
C類は西盟型銅鼓の実例として最も多いもので最盛期の製品とみなすべきである。C類の特徴を列挙すると、

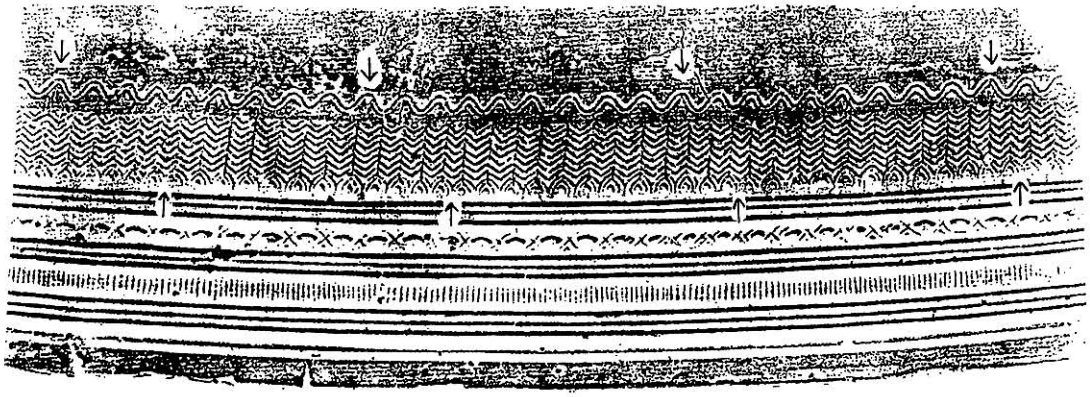
・失蠟法で鋳造する。
・単体スタンプだけでなく、回転押捺施文を多用する。
・全体がB類よりも大型化している。
・象、蝸牛装飾をもつものが多い。
・鼓面の蛙像は一～三重で、X字状に配置される。
・簡単な樹木状装飾をもつ場合もある。
・鳥文が退化するなど、文様内容はB類よりも新しい傾向を示す。
・丁寧に施文された繊細な文様が多い。
・大きさの割に薄く軽い。

西盟型C類の細分

C類については類例が多くそのなかでも先後関係を指摘することができる。本稿では具体例を詳しく検討する余裕がないが、その大略を次に示しておきたい。C類のうち古段階のものをC1類、中段階のものをC2類、新段階のものをC3類とする。

西盟型C1類　東京国立博物館所蔵銅鼓（東考1582）を代表とするもの。[9] タイ王室から寄贈されたものである。高四九・二センチ。面径六二・二センチ。C類としては相対的に古いもので、文様内容はB類に近い。特に鼓面文様にB類との関係の深さが現れている。その特色は、光芒が通常の十二本でなく八本であること、光芒間に鳥頭文を入れること、光芒先端が圏線をこえて





（矢印は回転の単位を示す）

挿図13　C類に見られる回転押捺施文（拓本）S＝2/3
（上）民博3号鼓鼓面　（下）民博5号鼓足部

とびださないこと。鳥文（小）が回転押捺施文ではなく単体スタンプであること、魚文と退化した変形羽人文をもつこと（西盟型B類と共通する）、蛙像が一重であること、などである。鼓面文様だけを見ればB類に含めたくなる。しかしその一方で新しい特徴もみられる。側面の文様に回転押捺が多用されること、とくに腰部文様帯下端には明瞭な回転押捺による波状文がみられること、把手の上下の幅がB類のそれよりもひろがっていること、把手の装飾性が強まっていること、面径が六十センチをこえる大型品であること、などである。このような特徴を総合すると東京国立博物館の西盟型銅鼓は回転押捺を用い始めた初期の段階のものと見なすことができる。回転押捺獲得の初期段階においては回転押捺される文様の割合が低いと考えられるからである。このC1類の資料は日本では東博例のみがあげられる。中国では西盟1号鼓がこの類とみられる。

西盟型C2類　さきに述べた民博5号鼓を代表例とするもの。西盟型銅鼓で最も文様の完成度が高く、側面だけでなく鼓面文様でも回転押捺施文を多用する銅鼓をさす。とくに分かり易いのは鳥文（小）が回転押捺され連続文様となっているところである。側面文様では綾杉状の回転押捺施文がはっきりみられる。蛙像は一重から三重まであり、象・蝸牛装飾や樹木状装飾はあらわれるが、まだ過剰な発達はしていない。西盟型銅鼓の大部分はこのC2類に含められよう。国内にある銅鼓を列挙すると、弥生文化博物館鼓、国立民族学博物館1・2・3・4号鼓、天理参考館鼓、大原美術館鼓、柳井誓光寺鼓[10]、国学院大学鼓、岩倉市舩橋楽器資料館鼓などであり、個人蔵銅鼓でも多くはこれに属するといえよう。世界的にみてもこのグループが最も多いようである。

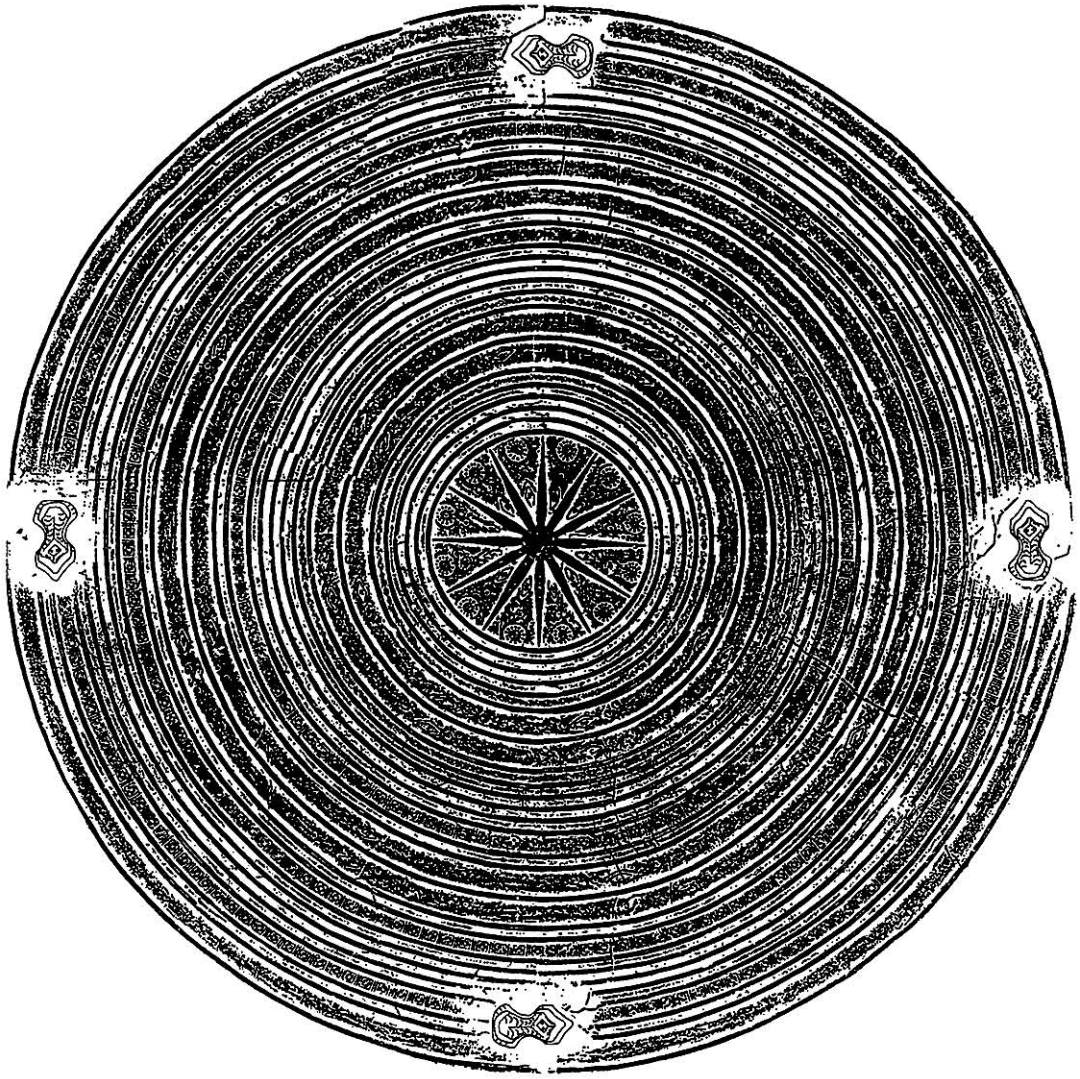
西盟型C3類　大阪音楽大学付属楽器博物館の所蔵銅鼓を代表例とするもの。西盟型銅鼓C類でも新しいと思われる要素をもつ。特に樹状装飾の発達したものをこれに含める。大阪音楽大学鼓では樹木状の立体装飾が過剰な拡大をみせている。通常多いC2類では樹木装飾はあっても直立する幹が主体で枝葉はあまり繁っていないものである。また施文技術の低下もみられる。回転押捺原体の施文が粗雑であり、均等な配列をしていない。これらの特徴はC類末期に置ける要素であり、過剰な樹木状装飾はつぎのD類に通ずるところがある。このC3類にはヘーゲルが文様細部を掲げた大英博物館1号鼓やウィーン18号鼓、また『中国古代銅鼓』に掲げられた孟蓮1号鼓などが含められるであろう。

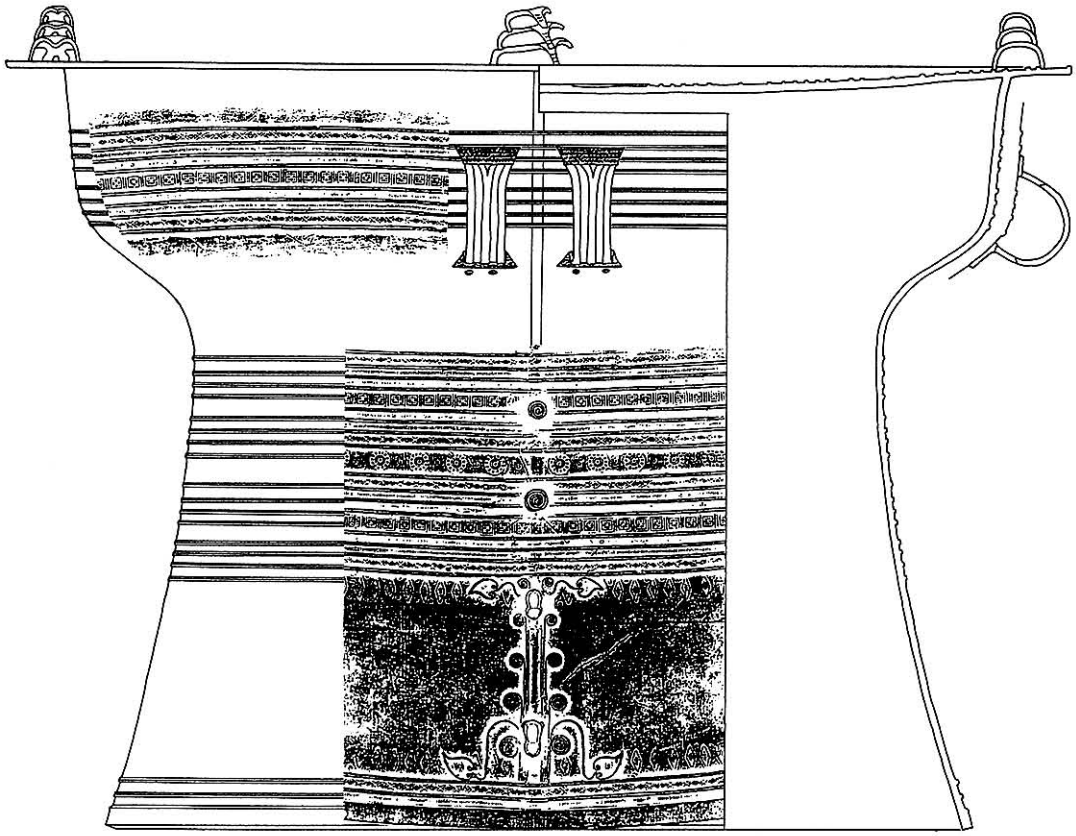
西盟型D類

西盟型銅鼓そのものは前記のB類・C類が中心であるが、それらとは一線を画する銅鼓が存在する。ここではD類として記述する。筆者がD類とするものは「失蠟法で鋳造し、施文に長分割型を使用する銅鼓」である。『中国古代銅鼓』では扱われていない。実例としては滋賀県の野洲町立歴史民俗資料館（銅鐸博物館）所蔵銅鼓（以下、野洲町鼓と呼称する）があげられる。野洲町鼓は銅鐸関連資料として購入されたもので、現在常設展示されている。

面径五六・〇センチ。高四〇・六センチ。足径四五・六センチ。重量は不明だがC類に比べかなり重い感触である。器壁は比較的厚い。表面は淡緑～茶色を呈する（挿図14）。

側面のプロポーションは腰部のくびれが大きく、足端部に向かってハ字状にひらいてゆく。鼓面は中央部がやや凹みをもっている。





挿図14　野洲町銅鼓（西盟型D類）　S＝1/4

挿図15　野洲町立歴史民俗資料館の銅鼓

把手は二条一組が対となって付いている。把手の形状は上下端があまりひらかずC類よりも一見古そうである。また鼓面の蛙像は三重で四方向に付く。しかし把手の位置に対して蛙像がその上側にくるという置きかたは西盟型では特異である。通常、蛙像は把手に対してはX字配置だが、本銅鼓は十字配置なのである。このような蛙像の配置はB類C類にはなかった。しかしこのD類とB・C類との本質的な差異はその施文方法の違いにある。

まず鼓面の文様から記述する。1～26区画ある（挿図21）。

中心区画（第1帯）は十二光芒。光芒の付けね部分がすこし細くなっているのが特徴。芒端は第1圏線をこえない。光芒間には菱形文・小円文・花文を入れる。B類では心葉形文を入れるが、C類では光芒間に文様を入れる例はほとんどないのでこの野洲町鼓は一見古そうに見える。しかしこれは施文の規範を守らないものと考えるべきであろう。

第2帯は櫛歯文。第3帯は円圏文。第4帯も円圏文。第5帯は櫛歯文。以上の2～5帯は文様を対称に配置したもので、先述のB類太皷館鼓でもみられる古い文様配置である。

第6帯は連続菱形文。一見回転押型による切れ目のない施文のようだが、実は菱形11単位ごとに切れ目があり、細長い施文面をもつスタンプによる「長分割型施文」である（挿図4の下）。第7帯は円圏文の4個配置と菱形文を交互にくりかえす施文。幅広の主文様帯。第8帯は第7帯と同じ。第9帯は連続菱形文で第6帯と同じ。第10帯は櫛歯文。第11帯は円圏文。第12帯は円圏文。第13帯は櫛歯文。10～13帯は2～5帯と同じである。

第14帯は連続方画文。舟文の変形したものか。これも細長い連続スタンプである。方形の区画を横方向に10個連ねて1連の文様としたものである。第15帯は櫛歯文。第16帯は円圏文の4個配置と菱形文を交互に繰り返す施文。7・8帯と同じく主文様帯である。第17帯は第16帯と同じ。第18帯は櫛歯文。第19帯は連続方画文。第20帯は櫛歯文。第21帯は円圏文。第22帯も円圏文。第23帯は櫛歯文。第24帯は連続方画文。第25帯は櫛歯文。第26帯は無文様。最外縁部。鼓面端部の圏線は素文であり、鎖状装飾ではない。また文様帯を区画する圏線はB・C類で見られた蠟糸によるものではなく断面M字形を呈する台形状の盛り上がりである。この特徴の違いも注意されるところである（挿図16）。

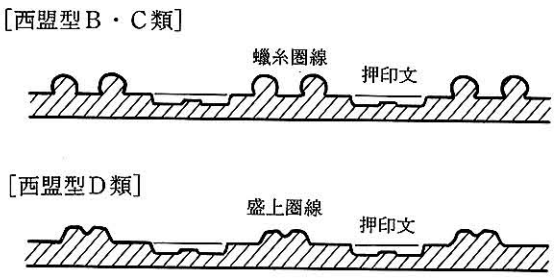
側面の文様

胸部文様帯　第1帯は連続菱形文。第2帯は櫛歯文。第3帯は円圏文。第4帯は連続方画文。第5帯は円圏文。第6帯は櫛歯文。第7帯は連続菱形文。胸部文様帯では第4帯を軸として上下対称に文様が配置されていることがわかる。この1～7帯の上下の組み合わせを仮にA群と呼ぶことにする。

腰部文様帯　前記のA群を主体とした文様帯である。上からA群―花文・円圏文―A群―そして菱形文・円圏文を垂下して施す。この垂下装飾が回転押型の綾杉文ではない点でC類とは全く異なる（挿図23）。

足部文様帯　腰部文様帯と対称となるように配置している。上から円圏文・菱形文―連続菱形文―櫛歯文の順序である。

側面の文様帯でも鼓面の文様で使用されたものをくりかえし使っている。文様内容を整理するとスタンプ文は全部で6種類にすぎない。西盟型銅鼓の文様の中では必ず用いられた飛鳥文や小鳥文が全く見られない。本来7・8・16・17帯という幅の広い主文様帯に飛鳥文は入れられるべきなのである。このような文様数の減少は製作の効率化と施文規範の崩壊、文様の意味の忘却の結果起こったとみられる。

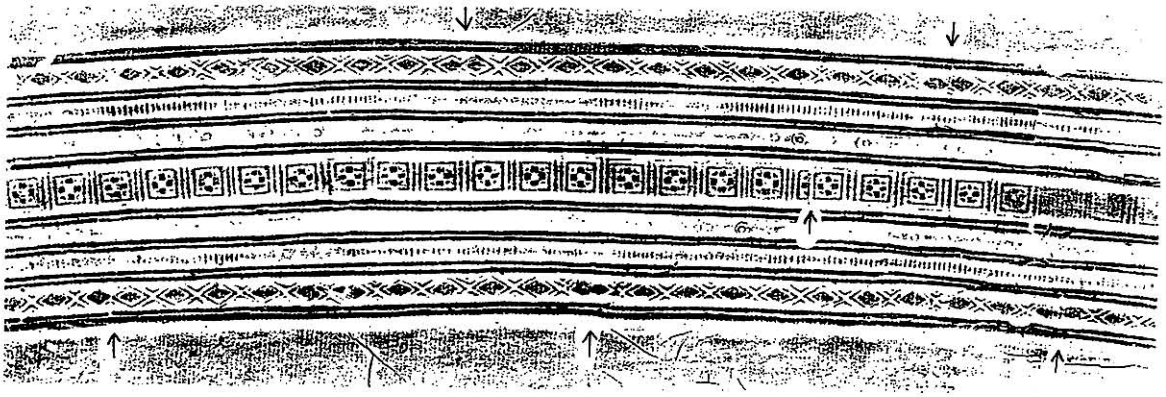


挿図16　西盟型銅鼓の鼓面断面模式図

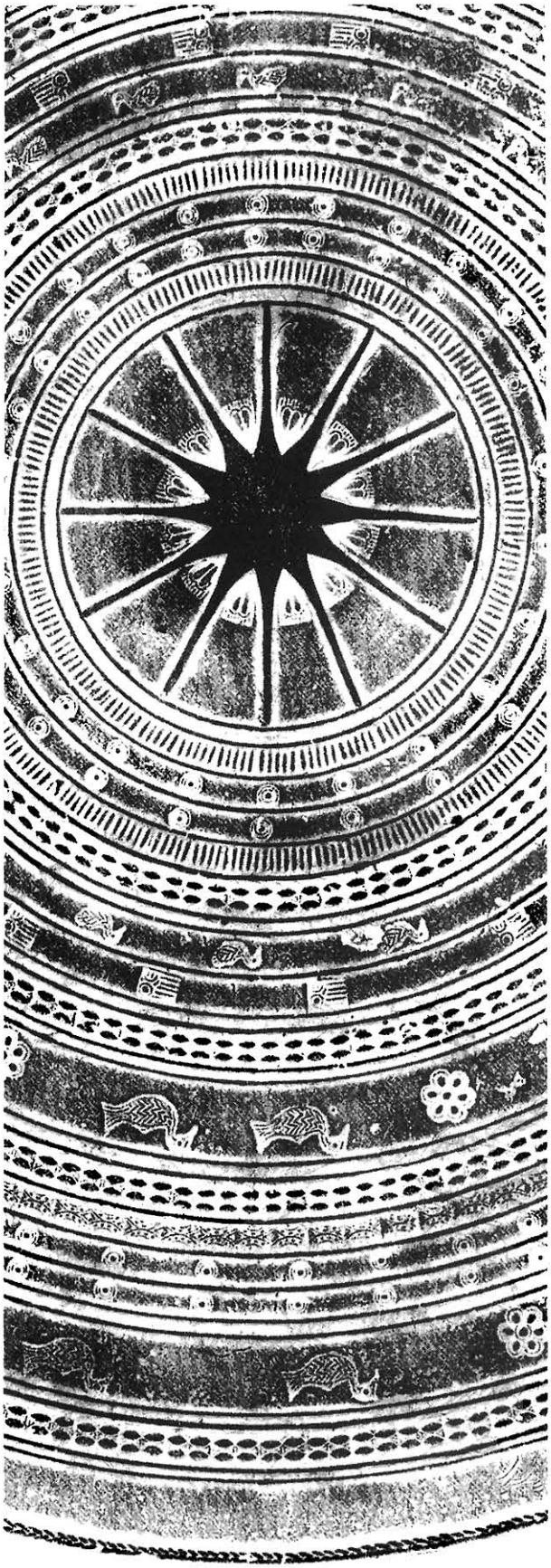
側面の立体装飾は下向きの象の小像が二体、蝸牛像が二個、蠟糸による渦巻状の樹状装飾からなる。

野洲町鼓の文様の特徴は前記のC類で多用された回転押捺施文ではなく、スタンプ原体押捺の境目が見えるような押し方をしているところにある。詳細に観察すると胸部文様帯の連続菱形文はおよそ九・五センチおきにスタンプの継ぎ目がみえる（挿図17）。これは継ぎ目のない回転押捺とは大きく異なる技術である。回転押捺による連続文様を模倣しようとして発明された新種のスタンプ原体なのであろう。

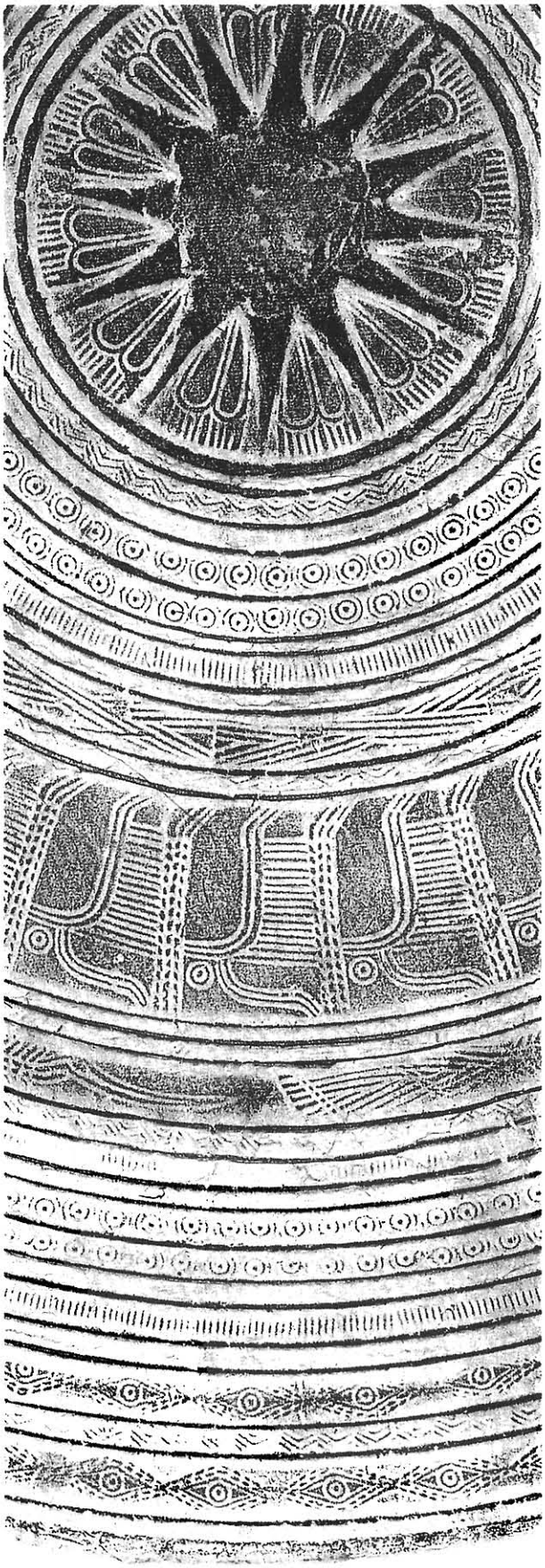
野洲町鼓の他、静岡県の浜松市楽器博物館に所蔵されている銅鼓がD類に含まれる。施文の雰囲気や文様形状は野洲町鼓に近似している。面径や高さも両者はほぼ同じであ



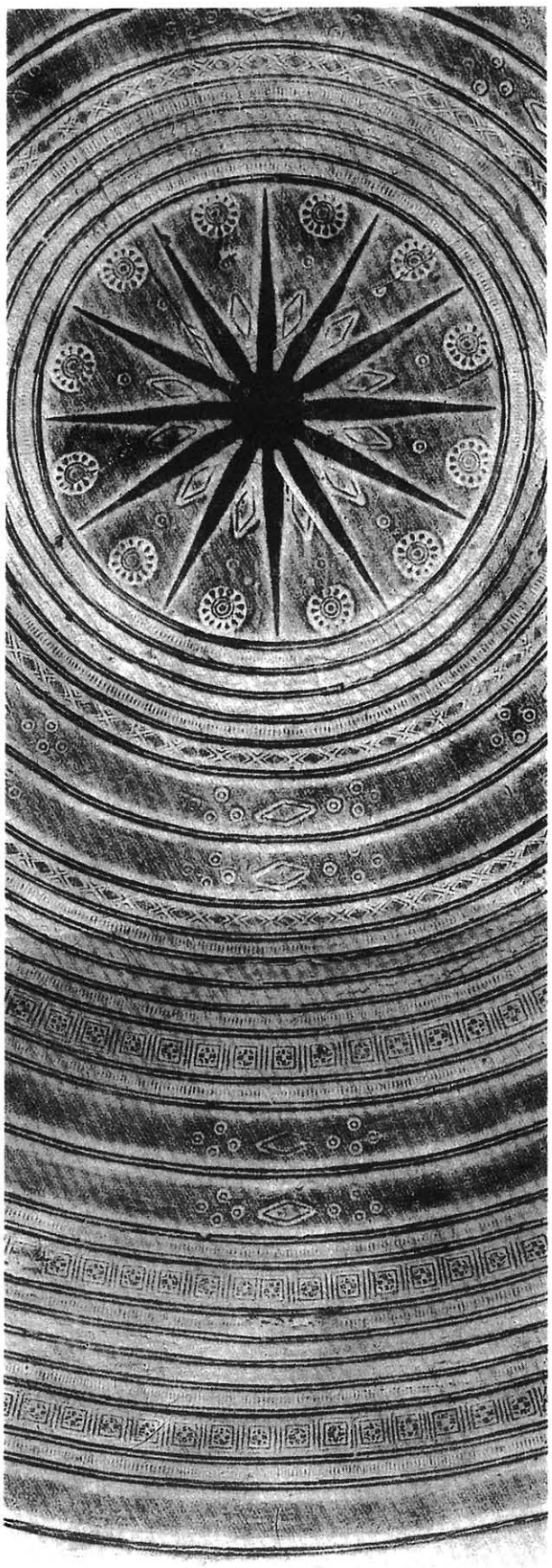
挿図17　野洲町銅鼓の胸部文様帯に見られるスタンプ原体の継ぎ目（矢印）拓本　S=2/3



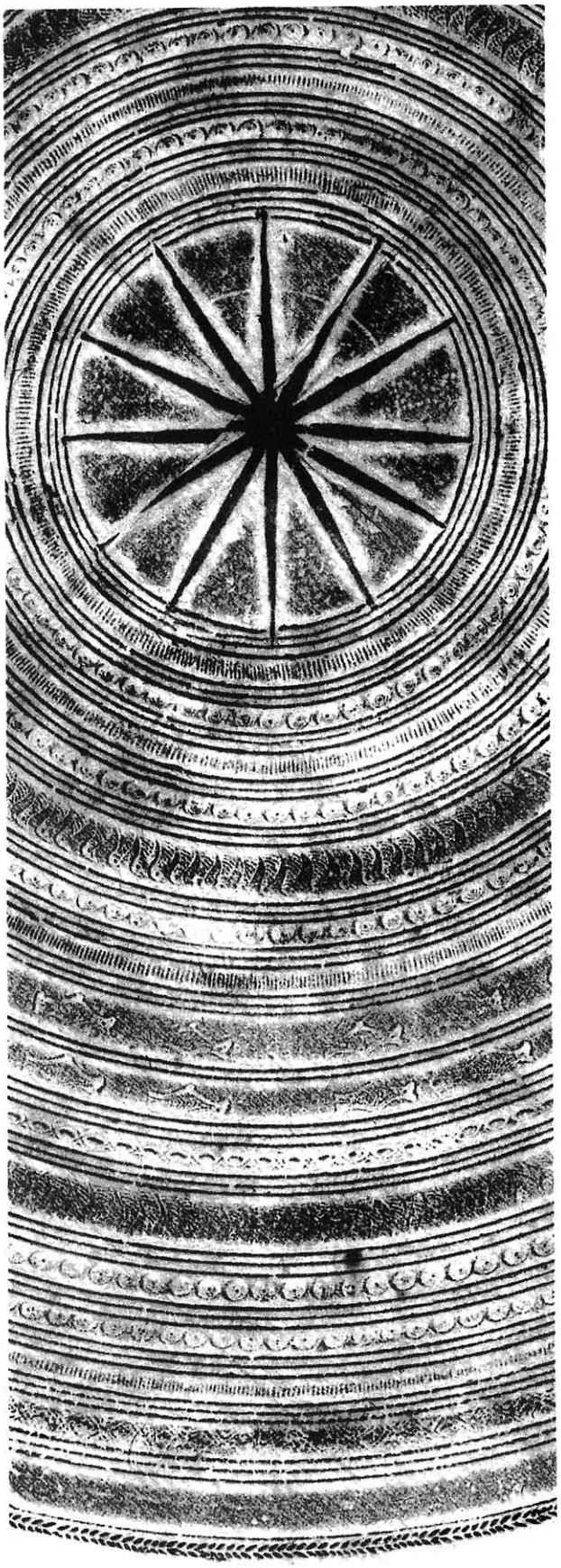
挿図19　太鼓館銅鼓（西盟型B類）　S＝3/5



挿図18　慶応大学銅鼓（冷水冲型）　S＝3/5



挿図21　野洲町銅鼓（西盟型D類）　S＝3/5



挿図20　民博５号銅鼓（西盟型C類）　S＝3/5

る。浜松市楽器博物館銅鼓は重量が二六・五キログラムにも達しており、C類とは比較にならないほど重いことは注意される。また埼玉県入間市の武蔵野音楽大学楽器博物館に所蔵されている銅鼓は側面形はヘーゲルの第Ⅰ型式に似ているが、文様内容や色調は野洲町鼓とほぼ共通しており製作の近さをうかがわせる。この武蔵野音楽大学の銅鼓はもはや西盟型とは呼び難いのだが一応このD類の末端に置いておきたい。

西盟型D類の特徴を列挙すると

・失蠟法で鋳造される。
・足端部のひらく特異な側面形である。
・文様の種類が少なく省略がすすんでいる。
・蛙像は三重で、十字状に配置される（配置がABC類と異なる）。
・腰部文様帯垂下装飾が単体スタンプである（B類と同じだが形は異なる）。
・単体スタンプでも回転押型でもない「長分割型」を使用して施文する部分がある。
・回転押捺施文は確認できない。
・器壁が厚くかなり重い。
・表面は青～緑色を呈する（通常の黒褐色ではない。付銹あるいは着色か）。
・鼓面周縁部には鎖状の装飾がない。
・圏線は蠟糸で成形したものではなく、盛り上げて成形したものである。
・立体装飾は比較的過剰な傾向をもつ。

このようにみてくると西盟型D類は失蠟法鋳造という点でB・C類と同様であるが、異なる点も多い。とくに回転押捺ではなく長分割型をもちいる点が注目される。全体のバランスも西盟型B・C類に比べるとあまり良くないように感じられる。

四　西盟型銅鼓の変遷過程

実例をあげて西盟型銅鼓をA～D類に四分類したのだが、それらはA→B→C→Dの順序に時間的な変遷をとげた。その根拠を簡単に整理しておこう。

まず鋳造方法についてである。西盟型銅鼓の中心的な製作技術は失蠟法鋳造であると述べてきたが、A類である広州博31号鼓はこれにあてはまらない。失蠟法獲得以前の姿と考えられる。西盟型銅鼓はある時点で失蠟法鋳造を導入したのだが、その時期から余り隔たらない時期に製作されたとみられるものがB類である。ただしA類とB類の差異は少しありすぎるので、将来的にはA類とB類の中間に位置する銅鼓が明らかになる可能性もある。この失蠟法導入の年代は、根拠は乏しいものの今から数百年前のことと思われる。西盟型銅鼓全体の変遷過程から推測して千年以上経過しているようには見えないからである。

はじめの部分でも述べたが西盟型銅鼓の本質のひとつが失蠟法鋳造であるとするとA類は正しくは西盟型には含まれないことになる。B類の出現をもって西盟型が成立したというのがより厳密な定義であろう。この失蠟法がどのようにして銅鼓の鋳造にとりいれられたのかは憶測の域をでないが、中国文化圏の技術というよりは西方のインド文化圏の鋳造技術の影響ではないかと考えている。その理由

としては、西盟型銅鼓の分布域が古い銅鼓の分布圏からみると西端にあたること。西盟型銅鼓と時期的に並行するとみられる中国広西省から貴州省に分布する麻江型銅鼓は伝統的な分割外型鋳造を続けていること。インド東部のデカン高原のバスタルの真鍮細工などで現在でも失蠟法鋳造による工芸品が製作されていること[11]（挿図22）。そこでは西盟型B・C類に特徴的な「蠟糸」による原型製作技術が多用されること。蠟糸を用いる失蠟法鋳造は中国南部やベトナムの鋳造品にはほとんど見られないものであること、などをあげることができる。このような西方からの失蠟法鋳造技術と中国南部に伝統を保っていた銅鼓の形状とが融合した結果、西盟型銅鼓B類が発明されたのではないかと考えられるのである。

失蠟法を得たのちの銅鼓は、文様の施文技術の差により明瞭な時期区分をおこなうことができる。すなわち単体スタンプのみの施文（B類）→回転押捺施文が加わる（C類）→回転押捺施文に替わって長分割型施文がおこなわれる（D類）、という三段階である。

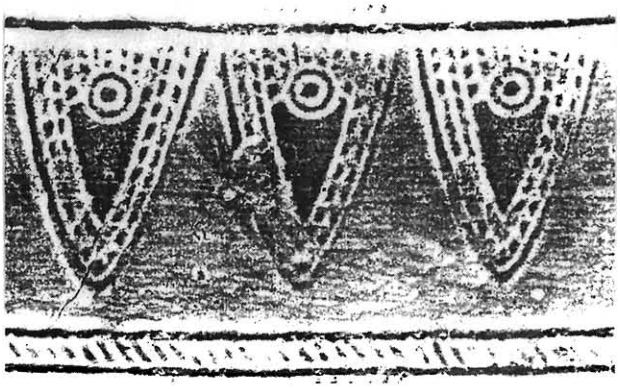
単体スタンプ施文は銅鼓の施文技術としては伝統的なものであり、石塞山型の一部や冷水冲型、北流型、霊山型では砂土製の外型に対して繰り返し押捺することによる製品でのポジ文様の連続というかたちであらわれる。挿図18に掲げた慶応大学所蔵の冷水冲型銅鼓[12]でも変形羽人文や飛鳥文は一見凹んだネガ文様に見えるが、実際は地文の部分が飛び出したポジ文様である。慶応鼓では円圏文や菱形文をみればポジ文様であり、施文が砂土製外型に対する単体スタンプ施文であることは明らかである。また麻江型銅鼓ではすべての文様はポジ文様の繰り返しであり単体スタンプの使用は明白である。砂土製の鋳型に対して繰り返しの文様を施文する場合、単体スタンプを用いることはごく自然である。西盟型B類とした失蠟法獲得直後の銅鼓にしても、伝統的手法である単体スタンプの反復押捺を行い続けたのであろう。しかし砂土製外型にスタンプを押せば製品は凸文様だが蠟原型に押捺すると当然凹み文様となる。西盟型の特徴である凹んだ文様は失蠟法と単体スタンプ施文の組み合わせの結果なのである。

西盟型B類において見られるのは単体スタンプ施文による凹み文様（鳥や魚の文様）ととびだした圏線（蠟糸の貼り付け）の組み合わせである。これはこれで完成しているように感じられる。それではなぜC類が現れることになったのであろうか。B類とC類の差異は単体スタンプの単純押捺施文（B）と円柱に文様を刻んだ原体を蠟原型のうえを転がすことによって得られる回転押捺施文（C）の差である。その差異の第一は施文速度の違いであろう。

蠟原型に単体スタンプをくりかえし押捺をおこなう場合、たとえ補助装置の助けを借りても難しく手間がかかる。一方、回転押捺では蠟原型のうえに接して原体を転がすことによって短時間で切れ目のない連続文様を得ることが可能である（雪道についた自動車のタ

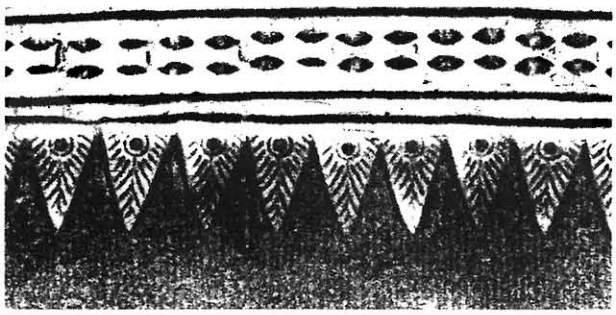
挿図22　蠟糸成形によって作られた真鍮製小像　高8.0cm、インド製、20世紀

挿図23　腰部文様帯下端の文様比較（拓本・実大）



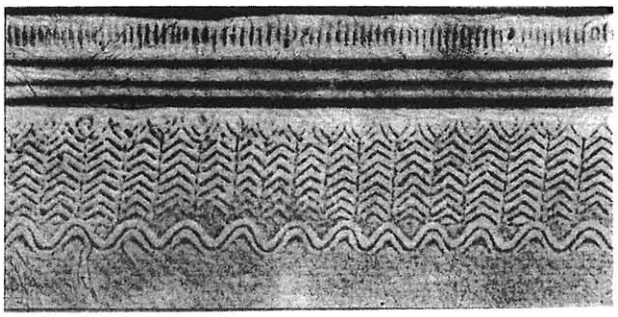
慶応大学銅鼓（冷水冲型）

慶応大学が所蔵する銅鼓は西盟型銅鼓ではなくヘーゲルの第Ⅰ型式後半に属する冷水冲型銅鼓である。この文様は足部に用いられる三角形の文様で、西盟型A類でも足部に見られる（挿図5）。B類の腰部文様帯下端の装飾の祖形といえる。砂土製の外型に対してスタンプを押捺したもの。したがって文様はポジ。



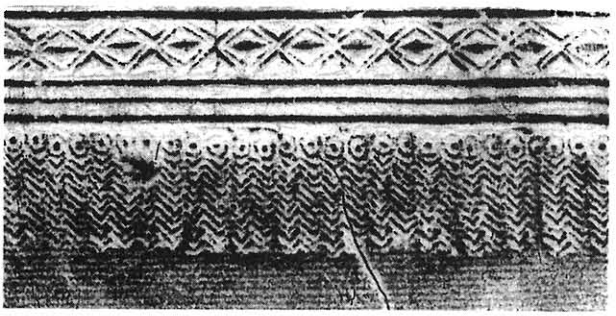
太鼓館銅鼓（西盟型B類）

西盟型B類の腰部文様帯下端の三角形文。古い銅鼓と新しいC類との中間に位置付けられる特徴を有している。三角形のスタンプを蠟原型に押捺したもの。したがって文様はネガ。上側の米粒状の文様も四個一単位のスタンプ文。



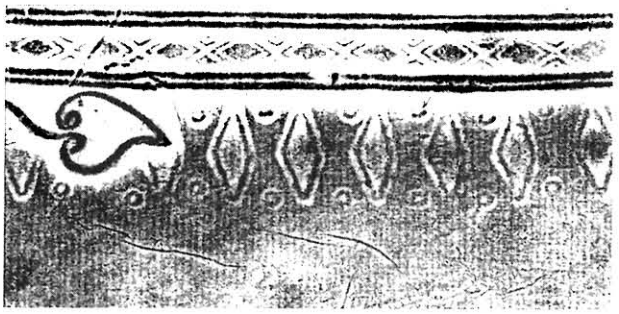
民博5号銅鼓（西盟型C類）

西盟型C類の腰部文様帯下端に多く見られる連続した綾杉文（魚骨文）。B類の三角形文との関連が想像できる形状である。蠟原型の上を綾杉文を刻んだ円柱（ローラー）を転がして施した文様。五・六センチごとに同じ文様が現れる。したがって原体は直径約一・八センチの円柱であることが分かる。文様はネガ。



民博4号銅鼓（西盟型C類）

本例も回転押捺によって施された文様。綾杉文の縦方向の軸線が失われ、波状文のようになっている。一回転の単位は不明。圏線の上側の連続した菱形文も回転押捺による。文様はネガ。



野洲町銅鼓（西盟型D類）

腰部文様帯の下端が単体スタンプの菱形文と小円文の組み合わせである。回転押捺ではなくひとつひとつ押している。技術の退歩。圏線上側の連続してみえる菱形文も横長九・五センチの長分割型によって施されたものである。蠟原型に押したので文様はネガ。左端の浮文は樹木状装飾の一部である。

イヤ痕を想像されたい）。また施文原体を同じ位置に置き、蠟原型自体を回転させても結果の文様は同じであり、実際の施文でそうされた可能性も高い。もともと回転体である銅鼓では引板を用いて基本的な成形をおこなうので、この引板になんらかの工夫を施すことにより、回転押捺を鼓面では同心円上に、側面では水平に、迅速かつ正確に施文することができるようになったのであろう。施文効率の向上は著しいといえよう。またその回転押捺施文技術がいかに巧妙であったかということは、原体に刻まれた精緻な文様が均等に配されているために一見まったく回転を感じさせない、切れ目のない連続文様が見られることからわかる。また原体作成に際して作業が丁寧で文様が均等に配置されたために、十個で一回転であるとかいう回転の単位を把握することが非常に困難な資料さえある。この西盟型C類（C2）において施文技術は極まったといえるのである。しかし筆者がC3類とした大阪音楽大学付属楽器博物館所蔵銅鼓では回転押捺の原体（ローラー）の文様に疎密の乱れが生じており、退化の兆しと見られる。

連続する文様の施文方法をたんに施文効率の順番だけでならべるならば、単体スタンプ施文（B類）→長分割型施文（D類）→回転押捺施文（C類）という順序であろう。しかし実際は長分割型を用いる銅鼓（D類）を最も新しいものと考えた。一見「技術の退歩」とみえるこのような事象は現実には起こりうることであろう。長分割型を使用するD類は文様形状の退化や施文規範の乱れ、側面形状の変化、把手の付く位置の変化、蠟糸成形の衰退、器壁の肥厚化などからC類より新しいものであることは明白である。

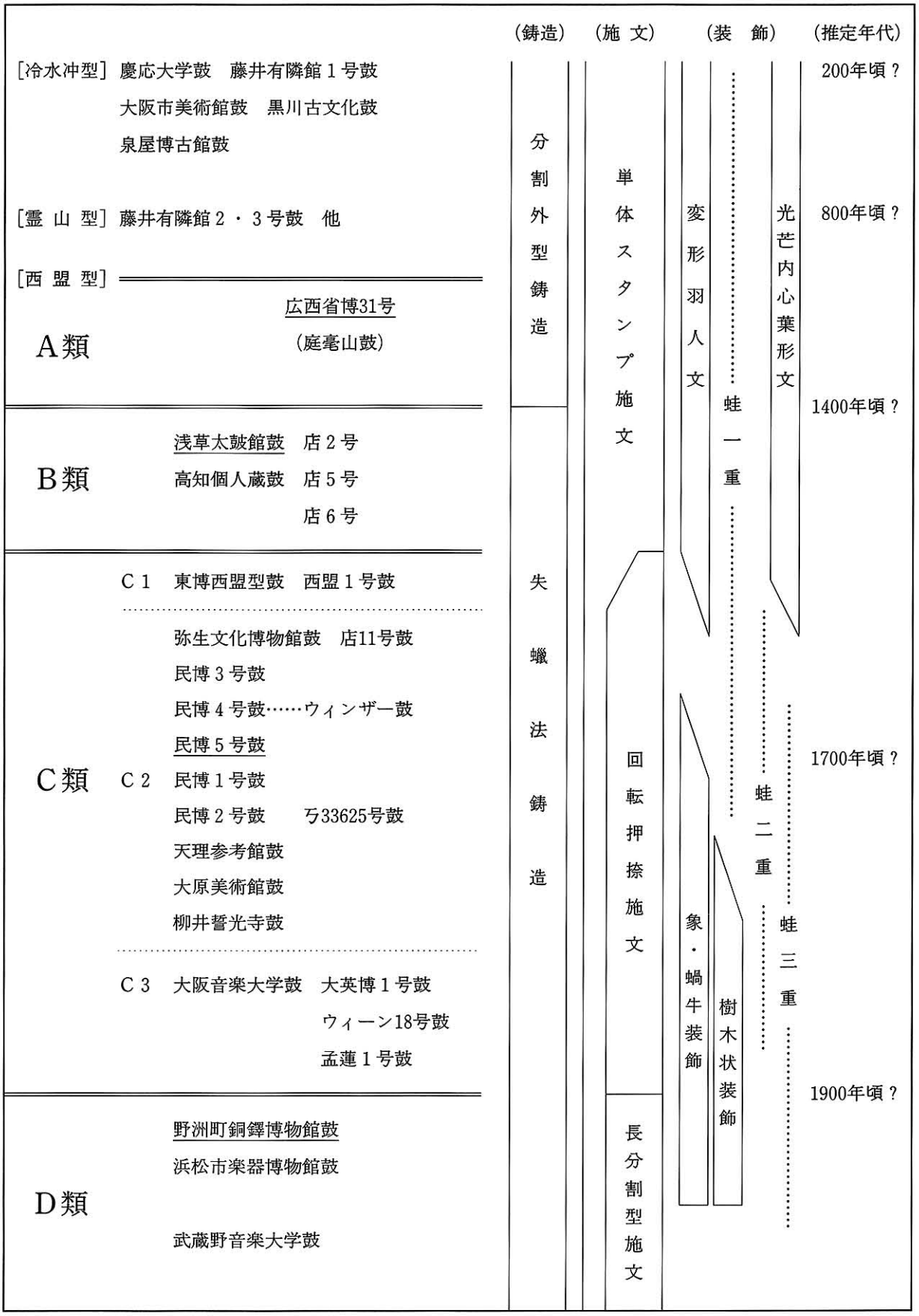
回転押捺（C類）から長分割型（D類）への退歩は連続する時間の技術系譜のなかでは起こりにくいことである。美しく繊細な施文が可能な回転押捺の技術を忘れ去ったのは、技術の断絶すなわち製作の系譜に時間的な空白があったためではなかろうか。現在に近い過去のある時期に数十年程度の銅鼓製造の断絶期間があり、そののちに再開された銅鼓生産は西盟型C類をお手本としてそれを模倣したもの（D類）だったのであろう。工房に伝来した施文具であるスタンプ原体はすでに失われており新たに製作されることになったが、回転押捺技法だけは忘れられた技術となり、それを極力模倣した長分割型施文を採用することになったと考えられるのである。西盟型D類はあきらかにC類よりも完成度は低く、守るべき規範をいくつも忘れている。また形状的に第I型式銅鼓を模倣したもの（武蔵野音楽大学銅鼓）が現れるなど、新たに外部の情報を製作に取り入れている。D類は二十世紀代に製作された非常に新しい時期の銅鼓と推測されるのである。

西盟型銅鼓を分類するための観察ポイントとして最も分かり易いのは銅鼓側面の腰部文様帯下端の文様であろう（挿図23）。B類とC類、C類とD類の差が明確に現れる部分であり、施文技法の違いがよく分かる。

西盟型銅鼓の変遷の大要は挿図24にまとめてみた。個々の銅鼓に関する記述は省略し、諸要素の変化の方向性を示すにとどめた。

五　西盟型銅鼓の文様

西盟型銅鼓の文様には独自のものもあるが前型式から引き継いだ文様も多い。



挿図24　西盟型銅鼓の変遷案

鳥頭文　中心光芒の内部に用いられる心葉形の文様であり、それ以外の部位で用いられることはない。また光芒内にこれ以外の文様を入れることも原則的にはない。冷水冲型（挿図18）や麻江型では一般的だが、西盟型では比較的古い段階のA・B類には見られるものの、最盛期のC類では省略されることが多い。D類とした野洲町鼓では光芒内に鳥頭文のかわりに菱形文や花文を入れているが規範を逸脱したものである。

変形羽人文　伝統的な文様である羽人文の変形したものは遊旗文とも呼ばれ、冷水冲型（挿図18）以降、霊山型・麻江型などにその系譜がつらなる。西盟型ではA類やB類にはそれが変形した文様をもつ（挿図5・8・19）。またC類においても方形区画の文様があり、変形羽人文（遊旗文）の末期形状とみることができる。西盟型銅鼓の変形羽人文は石寨山型銅鼓に見られる写実的な羽人文からは大きく離れた形状であり、製作や使用にあたってこの図像の意味が羽人文として理解されていたかは疑わしい。

大小二種類の鳥文　西盟型銅鼓で特徴的なことは鳥文（飛鳥文）を大小の組み合わせで用いることである。飛鳥文そのものは石寨山型の段階で多用されるが、鳥は一種類であった。西盟型A類においては大型二種類と小型一種類の計三種の鳥文がみられる（挿図5）。西盟型B・C類においては小型と大型の二種類の鳥文を使い分けている（挿図8、挿図13上）。大小二種類の鳥文は先行する北流型のなかに求められる。西盟型B・C類では小型の鳥文は立姿で、大型の鳥文は飛翔の姿であらわされるのが原則である。また西盟型C2類以降では大型の鳥文は単体スタンプで押すことを守っているものの、小型の鳥文は回転押捺施文されるようになる。C類の大型の鳥文はかなり便化が進んでいて鳥には見えないような形状のものさえ存在する。

菱形文　比較的地味な文様として長く用いられた。

魚文　西盟型B類（挿図6）にはよく見られるがC類では少ない。東京国立博物館保管銅鼓（C1類）には見られる。西盟型以外の銅鼓型式ではあまり見かけない。

花文　西盟型B・C・D類を通じて花文は用いられるが、西盟型以前の伝統的な銅鼓には無かった。西盟型A類にみられる四弁花文のような髪飾文（挿図5、鼓面の周縁部）が変化してB類のような六弁の花文（挿図6）が成立したのかもしれない。

船文　西盟型B類には冷水冲型銅鼓の胸部下段にあるような上下船底をあわせたような形状の文様の退化文様が存在する（挿図8の右上部）。ヘーゲル第I型式でよく見られた競舟図のなれの果てであろう。C類以降では不明瞭となる。

主要な単位文様の変化はこのようなものである。銅鼓の文様は二千年以上前の石寨山型から連綿と続きながらも少しずつ形状を変化させてきた。最新型である西盟型銅鼓においてもなお最古型式の文様を受け継ぐ部分が見られる。銅鼓文様の命脈は驚くほど長いものであったといえる。

象・蝸牛装飾　文様ではないが銅鼓側面に縦一列に象二・三頭とそれに続くように蝸牛が二・三匹、立体小像として表現されるものが多い。C2類に現れD類まで続く。この小像は規則正しく直線的に配列されており、単なる装飾ではなく何らかの重要な「意味」を持っているらしいが、その意味がどのようなものなのかは明らかでない。降雨・雨乞いに関連するという説がある。

樹木状装飾　側面に貼り付けられて表現された浮彫風の樹木形の装飾。C2類に現れるが必ず「象・蝸牛装飾」を幹に乗せて表現されるので何らかの関連があるらしい。象・蝸牛装飾よりは遅れて出現する。樹木の意味もまた不明であるが、しばしば「生命樹」であると記述されている。出現初期のものは幹ばかりで装飾性は少ないが、時期が降るに連れて枝葉の部分が大型化・過剰化していく。樹木様の立体装飾は他型式の銅鼓には全く見られない。西盟型銅鼓の特色のひとつである。

その他の立体装飾としては、魚文（大阪音楽大学銅鼓）やトカゲ（C類とD類に実例）などがあるが例は比較的少ない。

六　おわりに

本稿では西盟型銅鼓についてその施文技術の変化から変遷の大要を示した。しかし充分に検討できなかったも観点も多い。西盟型銅鼓各類の製作年代[13]やそれを使用する祭祀の実態、使用される社会での意義[14]、現在の製作工房の状況、文様や装飾の意味などである。

ただ本論では西盟型銅鼓の観察のポイントは整理することができたつもりである。今後とも資料の増加を待って先後関係の検討をかさねることとしたい。また全く同一のスタンプ原体を使用した兄弟銅鼓や引板を共有する同型銅鼓の存在も推定される。そのような観点からも西盟型銅鼓を整理分析することが可能となるであろう。非常に優れた鋳造技術をもっていた西盟型銅鼓の工人ではあるが銅鼓以外の青銅器をあまり作ってはいなかったようであり、類似する文様や技法をもつ製品をみつけにくい。銅鼓製作の社会的重要性を推測できる現象であろう。インドシナ半島山岳地帯のシャン族あるいはカレン族の社会において西盟型銅鼓がいかなる意義を有していたのかは文化人類学の研究課題でもある。

〈註〉

1　Franz Heger ALTE METALLTROMMELN AUS SÜDOST-ASIEN. 1902年　LEIPZIG

2　中国古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』文物出版社　一九八八年　北京

3　註2と同じ。

4　今村啓爾「出光美術館所蔵の先I式銅鼓―失蠟法で鋳造された先ヘーガーI式銅鼓発見の意義―」『出光美術館館報』56　一九八六年

5　西盟型銅鼓の鋳造過程について次の二つの文献にその記述が見られる。
蔣　廷瑜『銅鼓』人民出版社　一九八五年
ケマチャー・テープチャイ（横倉雅幸訳）「南タイ発見の銅鼓」『東南アジア考古学会会報』一二号　一九九二年

6　インド・デカン高原北東部のマディア・プラデーシュ州バスタル地方の先住民族マリア族の金属工芸品は蠟糸を多用する失蠟法鋳造である。永ノ尾信悟「ミツロウを使った鋳造」国立民族学博物館『大インド展―ヒンドゥー世界の神と人』展覧会図録　一九九一年
沖守弘「甦るいにしえの鉄づくり」『季刊民族学』六四　一九九三年

7　西盟型銅鼓の金属組成については中国での分析例がある。7例の分析の結果、銅は六八・五～八一・五%、錫は二・〇～一〇・五%、鉛は八・九～二五・〇%という値が得られている。同時期と考えられる広西省や貴州省の麻江型銅鼓と比較すると錫分が少なく鉛分が多い傾向がみえる。
中国古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』文物出版社　一九八八年

8　中国古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』文物出版社　一九八八年
広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』文物出版社　一九九一年
北京

9　東京国立博物館銅鼓の写真は平凡社発行の『世界考古学大系　第八巻

南アジア』昭和三六年　図版一〇一を参照のこと。

10 山口県柳井市の誓光寺所蔵の西盟型銅鼓については近藤喬一氏が報告している。

近藤喬一「柳井市誓光寺の銅鼓」『呉町廃寺発掘調査報告書』（山口大学人文学部考古学研究室研究報告　第4集）一九八七年

11 註6と同じ。

12 慶応大学銅鼓の内容は次の文献に実測図とともに記載されている。

松本信廣「古代インドシナ稲作宗教思想の研究―古銅鼓の文様を通じて見たる―」『インドシナ研究』一九六五年

13 西盟型銅鼓には銘文や紀年が全くみられないのでその所属する年代の手がかりは乏しい。中国の研究者は唐代貞元年間（七八五～八〇五）に驃国（現在のミャンマー）の銅鼓に関する記述が中国にあることから西盟型銅鼓の上限を唐代、下限を二十世紀初と考えている。しかしこの驃国の銅鼓が西盟型である確証はない。一方、タイの文献記録にはスコータイ朝（十三～十四世紀）からアユタヤ朝（十四～十八世紀）、ラタナコーシン朝（十八世紀以降）にかけて「マホーラトゥク」などの呼び名で銅鼓が記述されているという。しかしそれも西盟型銅鼓を指すのかあるいは別型式の銅鼓なのかは不明である。ちなみにバンコクの王宮に飾られている金箔貼銅鼓は西盟型C類である。

中国古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』文物出版社　一九八八年

ケマチャー・テープチャイ（横倉雅幸訳）「南タイ発見の銅鼓」『東南アジア考古学会会報』一二号　一九九二年

14 カレン族が使用する西盟型銅鼓ついては次のような記述があるがその根拠は確かめ難い。「印度支那では少し以前までカレン州グウェダウングのシャン族によりて製作せられた。そしてこの銅鼓製作技術は二百年前カンボジャ人から教えられたと云い伝える。銅鼓は北カレン族及び印度支那半島の中部種族では銅羅と同じ用を勤める。即ち宗教的の儀式及び戦時に鳴らされ、又単なる趣味としても叩かれるし、又時報にも打たれる事がある。」

太平洋協会編・清野謙次著『太平洋民族學』一九四三年　一一七頁

また雲南省西南部山岳地帯の佤族の銅鼓用例については次の文献がある。

汪寧生「佤族銅鼓」『古代銅鼓学術討論会論文集』文物出版社　一九八二年

本稿を成すにあたっては浅草太鼓館、慶応義塾大学、東京国立博物館、野洲町立歴史民俗資料館（銅鐸博物館）、国立民族学博物館、弥生文化博物館、国学院大学考古学資料室、浜松市楽器博物館、大阪音楽大学付属楽器博物館、武蔵野音楽大学楽器博物館ほか複数の個人所蔵銅鼓を調査させたいただいた。改めて深く感謝申し上げたい。担当者の方々にはご迷惑をかけたうえに筆者の怠慢で発表が遅くなったことをお詫びする次第である。また本稿は平成六年十一月二十日に開催された京都大学考古学談話会で口頭発表したものを骨子としている。